



## 大本山永平寺



### 若葉のころ

新緑が目には鮮やかな季節となりました。このころには残った雪もすべて解け、それと同時に草木が一斉に芽吹き始めます。

永平寺では、五月一日に今年の春上山した者が正式な修行僧として認められる新到掛搭式しんとうかたしきが行じられます。更に七日からは夏制なつせい中ちゆう（三カ月の禁足修行）も始まり、道元禅師のお膝元で仏道を学ぶ修行僧として本格的な第一歩を踏み出す季節なのです。

また五月下旬には、上山して間もない修行僧にとって初めて山外へ出ることが許される「木の芽拝登」があります。

道元禅師の晩年、日増しに病状が悪化するのを心配された外護げご者の波多野義重公はたのよむしげが、度々上洛して療養するよう勧められます。その申し入れを受けられた道元禅師は、弟子の懐契禅師えんじゆうを伴って京へと向かわれました。

途中脇元の宿で休み、翌日越前と若狭の国境にある木の芽峠で一息入れられた際、義介禅師をそばに呼び永平寺の留守を託されます。その時、義介禅師は万感の思いを胸に涙を流しながら別れを惜しまれたといえます。

新しい修行僧にとっては、木の芽峠を越えて行かれる道元禅師の御心に思いを馳せながらの拝登となるのです。

ご本山だより



## 大本山總持寺



### 一〇〇日間の夏安居げあんご

四月より新到和尚しんとうたちは、總持寺本山僧堂の一員として夏安居制中という修行集中期間に入っております。制中は夏季と冬季の年二回行じられ、ともに一〇〇日間続きます。

これは曹洞宗で定められる『行持軌範ぎょうぢきはん』に拠るものですが、その嚆矢こうしは今から七〇〇年前に總持寺開祖・瑩山禪師が定められた『瑩山清規けいざんしんぎ』（『洞谷清規とうこく』ともいう）に基づいているものです。

この『瑩山清規』を実践したのがお弟子の峨山禪師がさんぜんしと明峰禪師めいほうぜんしでありました。そして、お二人の多くのお弟子たちにより全国各地へ『瑩山清規』に基づく行持が伝播でんぱしていきました。ここにも、大いなる足音をうかがうことができます。

特に、五月十三日から十七日にかけては「制中五則」という行持が行われます。そのクライマックスが「首座法戦式しゆそほっせんしき」で、全修行僧の先頭に立つ首座が江川禪師の命を受け大勢の修行僧と禅問答を交わします。

このころになると新到和尚たちの表情が一段と引き締まり、本山の生活に馴染んできていることを自覚するのです。

その他、八日から九日にかけて恒例の「学校授戒会」が行われます。学校授戒会では総持学園鶴見大学附属高校三年生が本山に一泊し、江川禪師から御戒法と血脈を授けていただきます。

大本山總持寺／045-581-6021

# 曹洞俳壇

選・村松五灰子

## 停電に寒の星空賜りぬ

愛知県 中根 昂正

評 思わざる停電、それが夜空に輝く寒の星に気付かせてくれた。寒の厳しいところは空気も澄んで星空が美しい。

おそらく都会ではなく人工の光が夜空を壊すことのない郷の空<sup>そら</sup>だろう。「賜りぬ」が感動を語る。

## 泥大根生垣越しに噂添へ

東京都 伊奈 三郎

評 冬は特に美味しい、取れたて大根を道を通る知人に渡す。しかも興味たっぷりの情報付き。しばらくは続く立ち話。市井の人の暮らしの中を詠んだ。

◆寄鍋の向かふの夫の赤い顔 宮城県 須藤智恵子

◆結跏趺坐痺れる足に春近し 静岡県 富岡 一郎

◆凍鶴の如く合掌喪に服す 福岡県 安部 正和

◆丁寧に葛藤ときをり春浅し 北海道 大野 節子

◆待つという心の大事冬牡丹 静岡県 青山 清子

◆寒禽のこぼるる如く枝移る 鳥根県 藤江 堯

◆七人の敵なき米寿年新た 三重県 山下 利夫

◆もふこれで終はりだよねと雪卸す 新潟県 高橋 桂子

◆千年の杉拌みけり初詣 福島県 大槻 弘

◆動けるは幸せとして年迎ふ 岡山県 有元 克英

### \*選者吟

人生は四つ葉探しや夏に入る

五灰子

### \*作句小見

何か心が動いたとき。喜び、驚き、発見、充実感、悲しみ、叫びなどなど。わずかに自分をとらえたもの。俳句、それは身のまわりの生活の中にあります。それをあなたが見つけるだけです。

新緑の色ととのえゆく裾野

稲畑汀子

# 曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

「話せると楽しいのにな」 鶺鴒せせりは畑に草抜  
く吾に近寄る

愛知県 深谷ハネ子

評 鶺鴒がそう言ったようにも作者が話しかけたようにもと  
れたのしい歌だ。農作業をする人が自然とひとつになつて  
いればこそ鶺鴒は警戒心をもたずに近寄ってきたのだろう。

寺の夜の天井を走るハクビシン方丈様はあまり  
苦にせぬ

長野県 漆戸 榮子

評 ハクビシンはねずみや猫より大きな動物だから、寺の天  
井を走る響きはいかばかりか。しかし方丈さまはそのハクビ  
シンの狼藉をさして気になさらない。結句に大らかな人柄が  
髣髴かげふもつとする。

◆裏庭の積雪に継ぐ小さきあな近所の猫が散歩せしあと  
◆足掛けて左の腹より背を跨ぐ交互に揺れおり馬と私と

北海道 吉田 洋子  
山口県 横川美代子

◆えにしありきさらぎ凍て冬ほのぼのとほほえみ合へる越  
前水仙 福井県 三浦 豊子

◆山畑の無縁の墓地に竹茂りいつしか墓石見えなくなりぬ 秋田県 竹内 善郎

◆手作りのぶどう酒二口コーヒーは一日一杯あとは水のむ 北海道 佐賀 ユリ

◆葉の縁を赤くさせつも豌豆えんどうは凍りし土の水を吸い上ぐ 岐阜県 後藤 進

◆君のこと名前で呼ぶのは久しぶり実家に帰れば一人の娘 奈良県 鈴木 重雄

◆七草の草だね老いては寄せがたく手作り小松菜葉はなも 三重県 小阪 晋

◆小正月田舎の爺一人でも赤き水木に団子さしたよ 福島県 西木 甚

◆今日もまた積もるがままの屋根の雪一人暮しの心細さよ 山形県 長谷川順子

## \*選者詠

山鳩が真実かなしと鳴いている衰えぬはた  
だ母のたましい ちづ

## \*作歌小見

長谷川さんの歌からも雪国の暮らしの大変さが窺われます  
が各地の今冬の大雪に心から御見舞い申し上げます。鳥や動  
物は人ほどに言葉を持たないので想像力で思いを託すことが  
でき、深谷さんも私もそこを生かして詠っています。